

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

直接かわらないで、ただじつと見ている、あるいは何もしないでただ横にしているということが、^{注1}ポジティブな力になることがある。はじめての幼稚園^{ようちえん}。母親にじつと見守られている、^①カンシンをもたれていることで、はじめてひとりで新しい仲間の輪の中に入ってゆけたという思い出はだれにでもあるだろう。見守るとともに、聴く^きということにも、何もしいことが他人を深く支える、そういう力がある。じつさい、ひとは自分の落ちこんだ気持ちを、ひとに聴いてもらえる^②と楽になる。他人に話したら、理解してもらえなくても、聴いてもらえるだけでずいぶん楽になれる。

だれかにほんとうに聴いてもらいたくなるのは、^{注2}ふさいでいるとき、でも自分でも何を訴^{うた}えたのかよくわからないときである。しかし聴くというの^③はなかなかむずかしいことである。何か思いつめているときには、まず^②「口が重くなるが、「ふん、ふん」とうなずかれると、^③「という反発が先に立つ。それが感^{かん}染して、聴くほうも^④「と意^い固^こ地にもなる。聴こうとするといやがられるから、逆に^⑤ハナウタうたいながら用事でもしつと聴くとはなしに聴く、くらしい感じではじめて口を開いてもらえるということもある。

^⑥、聴くことがもつとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかっているときである。^{注4}重篤^{じゅうとく}な病気になる友人、家族を失った被災者^{ひさいしや}、子どもを失った両親、^{注5}ホスピスの患者^{かんじや}さん、くり返し病に冒^{おか}される知人……。^⑦このひとたちの前に立ったとき、とつさにどう声をかけていいのかわからず、ひるんでしまう。まさに聴くことしかできないのである。けれども、ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている。

このような場合にじつと聴くのがむずかしいのには、^⑧いくつかの理由がある。一つは、苦しみやふさぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっているから。なぜこのわたしばかりが病に冒されるのか、こんな状態でも生きつづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。「言^いったってわかってもらえるはずがない」。それでもようやくと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届^{とど}いているか確認しながらしか話せない^⑨ので、どうしても^{注6}とつとつとした断片的^{だんぺんてき}な

語りになってしまふ。

第三に、迎え入れられるという⑨ カクシンのないところでは、ひととは他人に言葉をあずけないものだ。ほんとうはそのことは考えたくない、忘れていたいのには、他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

⑩ 最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を⑪ ミウチは聞き流すことができず、それらに⑫ 過剰に反応してしまふ。「そんなこと思っていたのか。こつちの身にもなってくれ」と返され、そして「⑬」と二度と口を開かなくなる。

聴くというのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけということが意味をもつのは、いったいどうしてか。

苦しみやふさぎのなかに溺れてしまつていひとが、それでもそれについて⑭ 語るためには自分の苦しみやふさぎについて、どんなきっかけ、どんな経過でこんな苦しみやふさぎにおそわれることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうには、苦しみやふさぎから身を引き剥がし、ことさらに⑮ 時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。

このように自分の苦しみやふさぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。⑯ 苦しみやふさぎを当初あつたのとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語るこの意味はある。語るということは、相手に回答をもらうということではない。見えない⑰ 自分の姿を映すために、その鏡の役を⑱ 相手にしてもらふことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の中身が重いし、しかも相手からなかなか言葉が漏れてこないの、その⑲ 緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまふ。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのはこのことじゃないの？」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗つてしまふ。「わかつてもらえた」、と。が、これはじつはもつともまずい聴き方なのだ。⑳ 語るこの意味は、語るこゝとによってみずからの㉑ 閉塞から距離をとることにあるのに、そのチャンスを聴く㉒ ガワが横取りしてしまふからだ。これでは㉓ 聴くことにならない。

『わかりやすいはわかりにくい？』 鷺田清一

注1 ポジティブ・・・積極的。

注2 ふさいでいる・・・ゆううつになっている。

注3 意固地・・・自分の考えを変えないこと。

注4 重篤・・・病気が非常に重いこと。

注5 ホスピス・・・死期の近い病人の世話を行う施設。

注6 とつとつとした・・・ことがすらすら出ないでつまりながら。

注7 過剰・・・必要以上に多く。

注8 時系列・・・より早い日時からおそい日時へならべた順。

注9 緊迫・・・気をゆるめることができない状態。

注10 閉塞・・・とじてふさぐこと。

問一 — 部①・⑤・⑨・⑪・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 部②・③・④・⑫に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア わかるんだけどわかりたくない イ 言いたいことがわかってもらえた ウ 言っただけでわかるはずがない

エ 言わなきゃよかった オ そんなにかんたんにわかられてたまるか カ また今度言おう

問三 部⑥・⑩・⑭・⑰に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

(同じ記号を二回用いてはいけません。)

ア しかし イ だから ウ なぜなら エ あるいは オ そして カ つまり

問四 — 部⑦ 「このひとたち」とはどんなひとたちか。解答らんにあうように文中から二十六字でぬき出しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑧ 「いくつかの理由」とあるが、理由はいくつあるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一つ イ 二つ ウ 三つ エ 四つ オ 五つ

問六 — 部⑬ 「語る」とはどういうことだと筆者は言っているのか。文中から三十一字でぬき出しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問七 — 部⑮ 「自分」と — 部⑯ 「相手」とはだれのことを言っているのか。三字以内で文中の言葉を使って書きなさい。

問八 — 部⑲ 「聴くこと」を筆者はどのように考えているか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かおもいつめているひとの話はただじつと横にいて最後までひたすら聴き切ることが大切である。

イ 苦しみやふさぎのなかにおぼれてしまっているひとに対してなんとか回答をもらう聴き方が大切である。

ウ 自分の意見や考えを前面に出して相手のペースを考えないで聴くことが大切である。

エ 相手より上の立場に立って、話を聴いてあげるといことが聴くときにとっても大切である。

オ 特に注意していなくても相手の声が耳に自然と入ってくるように聴くことが大切である。

カ 受けとめること認めることだけが聴くことでなく時間をあげるといことが聴くときに大切である。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

聡子は時^①間になると、しぶしぶ塾^{へいじ}に行く^②準備をした。塾^③のカバンは夏期講習が終わつてから、一度も開けていなかった。聡子は、そのままのカバンを持って家を出た。

聡子は家を出て、どこへ行ってわけでもなく歩く。塾に行くのは、どうしてもいやだった。Bクラスなんて、いや。

聡子の足が止まる。

行くところもなければ、逃^にげるところもない。顔をあげると、^④淡いオレンジ色に染まった遠く空を、鳥が一羽きりで渡つていく。聡子は立ちつくしたままで、その空と雲とその下に広がる街をぼんやりと眺^{なが}めた。

もういやになっちゃったな……。

いつのまにか、聡子の足は動き出していた。その足はなぜか、お母さんが働いている駅前のデパートにむかっていた。

地下食品売り場は、夕飯の買い物をする人たちでごったがえしていて、あちこちからいい匂^{にお}いがしていた。聡子はこのまえお母さんがいた、アルコール類の売り場をそつとのぞいてみた。だけど、お母さんはいない。

今日はどこにいるんだろう。

聡子はお母さんを探してうろろした。私、何しに来たんだろう。頭にはそんな疑問が浮^うかんでるのに、身体^{からだ}が勝手にお母さんを探し続ける。まるで迷子になった子供みたいにせつぱつまった気持ちで、お母さんを探す。

だから冷凍食品売り場でお母さんを見つけたとき、聡子はあやうくお母さんに近づきそうになってしまった。あわてて、陰^{かげ}に隠^{かく}れ、こっそりとお母さんの方をのぞく。ハンバーグを売っているお母さんが、笑顔でお客さんと話をしている。そして、お客さんが行ってしまうと、トレイを片手に叫^{さけ}びだす。

「いかがですかあ。新発売のミニハンバーグです！」

聡子はその声を聞いて、^⑤をうたがった。

「お弁当のおかずがびったり、電子レンジで三分あたためるだけの、ミニハンバーグです！」

その声は、お母さんの声じゃないみたいだった。お母さんの声が、ちゃんと響ひびいている。裏返ることも、かすれることもなく、お母さん独特の高い声は、ざわついている食品売り場の中でも、特別に⑤についた。

お母さんも気持ちよさそうに声を出していた。まるで、歌ってるみたい。トレイをさしだす顔が、うれしそうに笑っている。断られても、顔色が変わらない。立ち止まってもらうと、笑顔ですすめている。

⑥お母さんの変わりように、聡子は目が離はなせなかつた。

そのとき突然とつぜん、後ろから肩かたをたたかれた。ふりむくと、そこには水色の作業着に長ぐつをはいたお父さんがいた。聡子が驚おどろいて口をきけないでいると、

「なんだ、聡子も見に来てたのかあ」

と、お父さんはにやにや笑って言った。聡子は気まずくて、くちびるをかんだ。

「お母さん、なじんでるよな」

お父さんが、腰こしをかがめてこつそりとお母さんのほうを見て言う。

「声も出るようになったしな」

聡子はお父さんもこつそり見ていたのかと、ちよつとほつとした。

「なんで⑦そんなかつこうしてるの？」

聡子は食品売り場にふさわしくないお父さんのそのかつこうが、気になった。

「えっ、仕事を抜ぬけだして来てるんだよ」

聡子は、お父さんの仕事ってこういうかつこうで働くやつだっけと思った。しかも、抜けだして来てるってことは、この辺で働いているのかなあ。お父さんが働いているビルは、電車で一時間くらいかかるところなはずなのに……。ききたいことがたくさんあるのに、声にならない。

「さあ、もう、行かなきゃ」

⑧

聡子は、自分ならきかれたくないことを、あえてきいてみた。

「いや、いいよ。こっそり見に来てるなんてばれたら、はずかしいし」

「そのかつこうで、こんなところにいるほうが、よっぽどはずかしいと思うけど」

「そうか？そう、みたいだなあ……」

お父さんはあたりを見回すと、頭をぼりぼりかいて⑨背中をまるめた。思わず笑った聡子に、今度はお父さんがきく。

「聡子は、今日は塾じやないのか？もう、はじまつてる時間じやないのか？」

聡子はどきんとして、塾のカバンをそっと背中に隠した。そんなことしても全然隠しきれなかったけど、どっちにしても、お父さんは聡子がどんなカバンで塾に行ってるかなんて、知らないのだ。大丈夫。⑩ばれてない……。

「うん、今日は休み」

お父さんが知るわけない。聡子が塾に行くのは何曜日かなんて、覚えてるわけない……。

「そうか」

お父さんは素直に納⑪得すると、じゃあと言って長くつをかほかほさせて行ってしまった。そんなお父さんの後ろ姿を見ながら、聡子は思った。

お父さん、お母さんの仕事に興味がないわけじやないのかあ。でもきつと、お母さんはこう思ってる。お父さんは、私の仕事に興味ないんだなって。だって、こっそり見に来てること、知らないんだから……。

⑫そこまで思ったとき、聡子はハツとした。そして、お母さんに見られないように、そつとその場から離れる。デパートを出ると、もうあたりは薄暗くて、いろんなビルからこぼれる明かりが、街をぼんやりと包んでいた。

聡子は大きく息を吸うと、塾にむかつて駆けだした。

走って塾に行くと、聡子はすぐに事務室に^⑬飛びこんだ。事務の沢口さんが、自分の席で仕事をしているのが見える。

聡子が駆けよると、その足音に気づいて沢口さんが言った。

「あら、なにやってるの。もう授業、始まってるわよ」

沢口さんは立ちあがると、柱についてる大きな時計を見た。聡子は、全速力で走ったものだから、すぐに口をきけない。

「ああ、テキストね。三条さん……Bクラスにさがっちゃったんだっけね？」

沢口さんがテキストの用意をはじめ。

「夏休みに成績が下がるってそんなにめずらしいことじゃないから、またがんばればすぐにAクラスに戻れるからね」

沢口さんはテキストを用意しながら、はげますように言った。だけど、聡子がききたいことはそういうことじゃない。聡子は呼吸を整えると、走ってる間に頭の中で用意していた質問を、沢口さんに投げた。

「お父さん、ここに来たことありませんか？」

「えっ？」

沢口さんは、テキストを渡そうとしたその手を止めた。

「うちのお父さん、ここに来たことあるんじゃないですか？」

「ごまかされたら困るので、つい言い方がきつくなってしまう。」

「ああ……」

とまどってる沢口さんを、聡子はじっと見つめた。その真剣な目つきに、沢口さんは小さくため息をつくとき、肩をすくめてみせた。

「お父さんには、内緒にしてくださいって言われてるんだけど……」

沢口さんは自分の席に座ると、聡子にもいすをさしだした。

「よく、いらっしやるわよ」

聡子はさしだされたいすに座ると、

「最後に来たのはいつ？」

と、次の質問をした。

「おとといよ」

「じゃあ、お父さん、私がBクラスなの、知ってるの？」

「ええ、ご存知よ」

聡子は、いっきに力が抜けて、抱^{かか}えていたカバンを床^{ゆか}に落とした。

お父さんは、聡子に興味がなかったわけじゃなかったのだ。お母さんの仕事をこっそり見に行くみたいに、塾にこっそり来て、塾での聡子の様子を確かめていたのだ。

『ハッピーノート』 草野たき

問一 — 部①・②・⑨・⑪・⑬の漢字の部首を書きなさい。

問二 — 部③「塾のカバンは夏期講習が終わってから、一度も開けていなかった」とあるが、「聡子」はなぜカバンを開けなかったのか。その理由を説明した次の文の 部に当てはまる言葉を、文中の言葉を使って十字以上十五字以内で書きなさい。
(句読点は字数に入れません。)

聡子は がいやだったから。

問三 — 部④「淡いオレンジ色に染まった遠くのを、鳥が一羽きりで渡っていく」様子を見ていた「聡子」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 遠くへ飛んでいく鳥が仲間とはぐれたのではないかと心配する気持ち。
- イ 自分とはちがつて自由に行きたいところへ行ける鳥をうらやむ気持ち。
- ウ 群れることなく自分の思うとおりに行動している鳥に感心する気持ち。
- エ 一羽で飛ぶ鳥を見て、孤独こどくなのは自分だけではないと安心する気持ち。
- オ 行くところも逃げるところもない鳥がかわいそうだと同情する気持ち。

問四

部⑤に、共通して当てはまる漢字一字を書きなさい。

- 問五 — 部⑥「お母さんの変わりように、聡子は目が離はなせなかった」とあるが、「お母さん」の声はどのように変わったのか。その変化を説明した次の文の部A・Bに当てはまる言葉を、文中の言葉を使ってそれぞれ十二字以内で書きなさい。
 (句読点は字数に入れません。)

お母さんの声が、前は していたのに、今は 。

問六

部⑦「そんなかつこう」とあるが、どのようなかつこうか。解答らんに合うように文中からぬき出しなさい。

問七

部⑧に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア お母さんが、心配で来たの？
- イ お母さんは、来ること知ってるの？
- ウ お母さんと、一緒に帰らないの？
- エ お母さんに、声かけないの？

問八

部⑩「ばれてない……」とあるが、「聡子」がばれていないと思っていることを十字以上十五字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問九

部⑫「そこまで思ったとき、聡子はハッとしたり」とあるが、「聡子」はどのようなことに気づいたのか。文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)